

# アヤソフィアの役割と存在意義の変遷

## —コンスタンティノープルの征服から現代まで—

Changing Roles and Significance in Hagia Sophia:  
From the Conquest of Constantinople to the Present

植田 奈々穂  
UEDA Nanaho

### 1. 序論

#### (1) 研究背景と目的

アヤソフィアは、トルコ共和国のイスタンブールにあるモスクであり、元はビザンティン帝国時代に建てられたキリスト教正教会の大聖堂であった。オスマン帝国がコンスタンティノープルを陥落させると、イスラーム教のモスクとして利用されるようになった。オスマン帝国が滅亡し、トルコ共和国が成立すると、世俗的な博物館として公開されたが、2020年7月には再びモスクとなった。

本稿では、コンスタンティノープルの征服から現代に至るまで、社会的、文化的にアヤソフィアが受けた影響と、与えた影響を考察する。そして、アヤソフィアが時代ごとにどのような立ち位置を求められ、どのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的とする。

#### (2) 研究方法

本研究では、オスマン帝国や帝国に影響を与えた国や地域の動向と、アヤソフィアにどのような変化があったのか、また、アヤソフィアがどのような役割や立ち位置であったのかを文献を用いて調査した。主に書籍と論文を用いて行ったが、トルコ文化観光省やイスタンブールにおける博物館のHPなども参照した。

### 2. 十八世紀までのオスマン帝国とアヤソフィア

#### (1) 十八世紀までのオスマン帝国

オスマン帝国は多種多様な地域と人々を包括していたが、イスラーム法の理論に基づいて寛容性と柔軟性をもつ共存システムを形成してきた。キリスト教徒やユダヤ教徒を庇護民として生命や信仰を保障し、デヴシルメ制によって身分や出身に関わらず支配組織の中で活躍することもあった。

コンスタンティノープルを征服したメフメト二世からスレイマン一世までの時代は、遠征を積極的に行っていたが、セリム二世以降はオスマン帝国の内政に注意が向けられた。

#### (2) 十八世紀までのアヤソフィア

メフメト二世はコンスタンティノープルを征服後、ハギア・ソフィア大聖堂をアヤソフィアに改めた。キリスト教の特徴である鐘や十字架、イコンは取り

除かれ、ミフラーブやミンバル、ミナレットが設置されて礼拝施設としての機能が追加された。また、征服の証として礼拝用の絨毯をアヤソフィア内に吊るした。バヤズィト二世がミナレット一本追加したことで、アヤソフィアのミナレットは二本になり、スレイマン一世は、ハンガリー帝国の戦利品としてブロンズ製の燭台をアヤソフィア内に置いた。セリム二世は自身の墓廟をアヤソフィア内に設置し、ムラト三世はセリム二世の提案に基づいてミナレットを二本追加し、合計四本となった。また、ムラト三世も自身の墓廟をアヤソフィア内に置いた。

スレイマン一世までの時代では、キリスト教や西欧に対するイスラームやオスマン帝国の勝利の象徴、セリム二世以降は、オスマン帝国の繁栄やスルタンの権威を象徴となっていた。オスマン帝国は大聖堂を破壊せず、変更を加えながら緩やかに帝国の中に取り込んでいったことが分かるが、これは、多様な地域と人々を柔軟に取り込んでいくというようなオスマン帝国の在り方を反映していると考えられる。

### 3. 近代オスマン帝国とアヤソフィア

#### (1) 十九世紀以降のオスマン帝国

十九世紀からは、近代西欧の影響で新しいアイデンティティの源泉としてナショナリズムが生じ、各々が自らの国民国家を求め始め、ムスリム優位下の不平等な共存システムが機能しなくなっていった。オスマン帝国中心部は帝国の統合理念としてオスマン主義をとっていたが、帝国領から次々と民族独立が行われたことや、イスラーム主義の台頭によってトルコ・ナショナリズムが顕在化していった。

#### (2) 十九世紀以降のアヤソフィア

アブデュルメジト一世の大規模修復の際に新しいムハンマドと正統カリフの円形のパネルが設置された。修復の過程で発見されたモザイクは覆われるか回収されたため、内装としての変化は壁面の修復に留まった。アヤソフィア周辺では、景観のために南側にあった木造住宅が取り壊された。

近代オスマン帝国時代に加えられた変化は、イスラームのモスクであることをより強調させる変化であるが、発見されたモザイクにスルタンが肯定的な反応を示したことや、西洋人の建築家を雇って行わ

れたことから、前章で見たビザンティン文化や西欧を柔軟に取り入れる姿勢は続いており、アヤソフィアが西欧との関わりの中でオスマン帝国の繁栄を象徴している点も受け継がれてると考えられる。また、二十世紀にはコンスタンティノーブルの征服記念式典にアヤソフィアが利用されるようになった。これは、オスマン帝国やイスラームが西欧と比較して優れたものであることを示す意味があると考えられ、オスマン主義やトルコ・ナショナリズムが台頭してきたオスマン帝国の在り方を反映していると考えられる。

西欧からの視点では、旅行先としてのイスタンブールを象徴する建物という見方だけでなく、西欧の人の目に触れやすくなったことや第一次世界大戦でオスマン帝国が敗北したことで、教会堂としての歴史を持つキリスト教の建物として再認識され、教会として機能を取り戻すことが期待された。

オスマン帝国と西欧のどちらの考え方もそれぞれの所属を象徴する建物として認識されており、アヤソフィアはこの時代でも特別な地位を有し続けたと考えられる。

#### 4. トルコ共和国とアヤソフィア

##### (1) トルコ共和国建国から現代まで

初代大統領のケマルは、トルコというナショナル・アイデンティティの確立と、イスラーム世界とは決別したトルコ共和国の世俗主義を進めた。しかし、ケマルの死後徐々にイスラーム主義が復活し、エルドアンが大統領に就任する頃には、西欧との関係悪化に際してイスラームを強調する新オスマン主義が展開されるようになった。

##### (2) トルコ共和国のアヤソフィア

アヤソフィアの役割が博物館になったのは、近代化と西洋化を進めるための世俗主義政策の一環であった。西欧の仲間入りを目指したトルコ共和国であったが、イスラーム主義が徐々に復活していたことでアヤソフィアは博物館でありながらモスクの機能を持つようになっていった。多くの国民がモスク回帰を望む中、EU加盟の望みが薄くなっていった影響でアヤソフィアは再びモスクとなった。

西欧との関わりの中で自らを定義するという部分は、オスマン帝国からトルコ共和国にも受け継がれていると考えられ、博物館の転用や、モスクへの転

用、二階ギャラリーの入場を可能にしたのは、トルコがかつてのオスマン帝国ほどの強さを持たないなかで、西欧の動きに影響されたことを反映していると考えられる。オスマン帝国のように西欧の人材や文化を取り込んでいたのとは異なり、西欧の仲間入りを目指し、それが困難になるとトルコ・ナショナリズムやイスラーム主義によって自らと西欧を区別したトルコ共和国の在り方が、博物館転用、モスク転用に表れている。一方で、一階と二階で機能を分け、教会堂であった歴史を積極的に伝える展示を行うことで、西欧やキリスト教世界に対して歩み寄りの意志があることを、アヤソフィアを利用して示そうとしているとも考えられる。

#### 5. 結論

アヤソフィアは、オスマン帝国の誕生から発展、衰退、トルコ共和国の建国、そして現在に至るまで、その時代の社会的、文化的な歴史を象徴する存在であり続けたと考える。教会からモスク化、博物館化、そして再モスク化という転用はもちろん、どのような存在であったのかもそれぞれの時代で変化しており、それらの変化は、イスタンブールだけでなく、オスマン帝国やトルコ共和国全体、そして西欧の影響を大きく受けてきた。特にオスマン帝国時代は、西欧との関係の中で自らの国を定義づけ、西欧をはじめとした他の国や地域の人々を取り込んで繁栄していくという在り方が、アヤソフィアにも反映されたことで、役割は異なるがビザンティン帝国からの特別な地位を保持し続けたのではないかと考える。そして、それぞれの時代の為政者たちは、それ以前のアヤソフィアの歴史や立場を評価し、尊重した上で、その時代にふさわしいと考える役割や存在意義を与えてきたと考える。このような歴史を繰り返してきた結果、役割や存在意義は変化しながらも、どの時代でも特別な地位を与えられ、偉大な姿とともにその象徴性は現在まで受け継がれている。今後も、アヤソフィアの現在の立場を含めた歴史を尊重しながら行く末を決めていくのであれば、役割や存在意義が変化しても、社会的、文化的メッセージを内包するというアヤソフィアの価値や、他の建物とは異なるアヤソフィア特有の立場を継承することは可能であると考えられる。

---

**Abstract:** Examines the social and cultural impact of Hagia Sophia from the conquest of Constantinople to the present day, and identifies its role and significance. In the early Ottoman Empire, it signalled the victory of the Ottoman Empire over Christianity and the West, and later, as domestic politics became more important, it came to symbolise the prosperity of the sultan and the empire. In modern times, it functions both as a mosque and as a museum, reflecting different demands from the western world and domestic Islam.